

異年齢クラスにおけるインクルーシブ保育の方法

——プロジェクト活動の実践分析を通して——

山本理絵*¹・山中智尋*²・高尾晴香*²・國京恵子*³

I. 研究目的・方法

1. 研究目的

本研究では、異年齢保育が人間関係に困難を抱える幼児等を含んだインクルーシブ保育（「多様性を前提として、違いを尊重し生かすことで、排除なく共に育ち合う環境を創造していく保育のあり方」¹⁾）をつくりやすいこと²⁾、プロジェクトアプローチがインクルーシブ保育においても有効であると考え、特別なニーズのある子どもを含むクラス集団におけるプロジェクト活動の効果と保育者の指導・援助方法のポイントを明らかにすることを目的としている。これまでの実践分析に引き続き³⁾、異年齢クラス編成の保育園における1年間のプロジェクト活動を実践分析する。

なお、ここでは「プロジェクト活動」の条件は、以下のように捉えている⁴⁾。①子どもの興味・関心に応じたテーマである。②保育者はおおまかな計画は持っているが、子どもたちの発想や話し合いによって展開される。③活動の途中でも疑問や問題が生じてきて、それを探究したり解決したりしようとする。④個々の子どもの関心事やアイデア、活動の経過と結果などは、話し合いやドキュメンテーションによって共有されていく。⑤保育者も一緒に楽しんで探究していきながら、園外の地域の人々などとのつながりや社会参加につながるように活動が発展していく。

2. 研究方法

(1) 観察方法

A保育園の幼児異年齢クラスにおいて、月1回程度の参与観察及び保育者とのカンファレンスを継続的に行った。A保育園では、3～5歳児は異年齢クラスであり、各クラスでプロジェクト活動に取り組んでいる。

観察は、午前9時すぎ頃から11時半頃まで、通常の保育の流れの中で参与観察を山本・國京の2名で行った。カンファレンスは観察の後2時間程度行い、クラス担任（山中・高尾）及び主任と一緒に、プロジェクト活動の様子、注目している子どもについての1か月間の状況・変化や気になっていること、観察でみられたことなどを報告し、その意味や今後の方針などについて話し合った。カンファレンス終了後に筆者らで記録を作成し内容を確認した。観察・カンファレンスには、白石叔江（愛知淑徳大学）も参加し、とくにドキュメンテーション及びプロジェクト活動については助言的役割を果たしていただいた。

(2) 分析対象資料と分析の視点

分析対象とした実践は、2019年4月～2020年3月に観察・調査した、R組（3歳児6人、4歳児8人、5歳児8人、計22人）の実践である。園でプロジェクト活動を取り入れて4年目の実践になる。上記の観察及びカンファレンスの記録の他、保育園で作成しているプロジェクト活動の記録（ドキュメンテーション）及びまとめも分析の資料とし、プロジェクト活動の発展と子どもたちの参加状況、保育者の援助、環境構成の工夫について分析する。具体的には、以下の視点から分析する。

①多様な個性・特性をもった子どもたちがどのようにプロジェクト活動に参加し、活動や集団がどのように変化・発展していくか。とくに、5歳児Yや年齢の違いによる参加の仕方の違いに視点を当てる。Y児は、待つことが苦手で、一方的なおしゃべりが止まらないこともあり、相手の意を汲んだ会話は難しい。しかし、自分のやりたいことははっきり主張し、自分の

興味のある活動には熱中し楽しむことができる児である。

②展開方法：プロジェクト活動において、どのような援助方法が有効か—子どもたちとの話し合い、イメージの共有、子どもの発達を踏まえた援助、保育者以外の専門家や保護者・地域社会の人々との連携等の視点からそのポイントを明らかにする。

(3) 倫理的配慮

本研究の実施・発表にあたっては、対象の保育園及び保護者には承諾を得、愛知県立大学研究倫理審査委員会の許可を得ている。また、連携研究者でもある白石は、自らの研究テーマで本実践に関わる研究を行っている、愛知淑徳大学の研究倫理審査を受けている。

II. プロジェクト活動の実践結果と分析

1. 環境構成と子どもたちとの話し合い

このクラスでは、年度の初めに遊びのコーナーを見直し、充実させ、子どもたちが好きなあそびを自ら選び、じっくりと取り組めるような環境を作った。そして、楽しいこと、みんなのやりたい事をたくさん行っていくことにした。行事を行ったり、ランチルームとして使ったりしているホールで、大掛かりなものは作り上げていく。廃材や道具を子どもたちが欲しい時に自ら使えるよう、置き場所を決め、知らせている。保育者は、常にアンテナを張り、廃材で使えるような物を探し補充している。

日々の活動については、毎朝、各クラスの集まりで、今日は何をするか聞き、その日の活動を子どもたち自身で決めてもらっていた。だれがどのような意見を言っても良い場として位置づけ、保育者はもちろん、子どもたちも互いに意見を否定しないようにしている。保育者はできるだけ子どもたちの思いに寄り添い、意見として出たことは実現したいと考えている。そして、週の予定も、先に予定のある日を埋め、残りをみんなで決めるという形で週案も立ててもらうようにした。その後、年明けごろから各チームで今まで行ってきた中から、いろいろな物を作り上げていき、2月の作品展に展示してそれで遊ぶことにしている。

日々の保育は、子どもたち主体でみんな考えたり、悩んだりしながら行っている。そこで、その日行ったことをドキュメンテーション（写真にコメントをつけたもの）にし玄関前に掲示し、子どもたちはもちろん、保護者にも見てもらえるようにしている。そして、これが保育日誌にもなっている。

園では、幼児の職員と園長、主任で週に一回、各クラスの状況や今後の予定などの話し合いをしている。この場でも、どの職員も自分の思いや子どもたちの思いなどを伝え合うようにしている。また、年に3回程度、同じ法人の他2園と合同で、プロジェクト型保育についての合同研修も行っている。

2. アイドルごっこからコンサートごっこへ

(1) 子どもの興味を踏まえた環境構成と思考を促す援助

子どもたちが日ごろ楽しんでいることに依拠して、子どもたちの夢を実現させる方向で、保育者は援助している。まず、保育者は子どもたちの興味を勘案して以下のように環境構成している。

〈記録1 4月〉

年度の初めにコーナー遊びが充実できるよう、ドレッセルルーム、射的の玩具、戦いごっこ用の痛くないスポンジ製の剣、粘土やスライムなどで遊べるコーナーを部屋に作った。すると、部屋のコーナーの一角から可愛らしい衣装を身に着けた女の子がたくさん出てきた。「どうして女の子の服はあるのに、男の服はないの？」と怒る人。これはまずい。なにか用意してあげないと……と感じた。そこで、男の子はどんな衣装が好きなんだろう……。まずは、百均でカラーのレインコートを用意し、袖を切り、クリスマスツリーの飾りのようなキラキラするメッキモールを首元や裾につけてジャニーズのような衣装を作った。さらに、子ども用サングラスとマイク、楽器、メガホンを置いた。

衣装や着飾る物を用意し、ステージ「アイドルごっこ」をすることになった。すると、たちまちコンサートが始まった。その時に歌うのは毎回ドラゴンズの応援歌と「パプリカ」だった。(表1 5月8日)。保育者は、常設している衣装コーナーにアイドルに変装するための道具を揃え、紙吹雪も作って準備している。CDには、毎年夏祭りや運動会で踊っている馴染みの区民の歌もあった。園長も本物のギターを弾いてみせることによって、子どもたちの興味が盛り上がりつついった(表1 5月18日)。

アイドルごっこと同時に、野球のドラゴンズファンの子どもの多く、毎日歌を歌ったり、野球を見に行きた話をしたりしていたことがあり、「ドラゴンズごっこしたい！」という声を拾って、皆で遊ぶことになっ

異年齢クラスにおけるインクルーシブ保育の方法

表1 コンサートごっこの流れ

月日	タイトル	内容
5/8 (水)	アイドルごっこ	本物のマイクスタンドを用意し、キラキラの衣装も身につけてテーブルをステージにして「アイドルごっこ」をした。「もーやっこ」(区民のうた)の音楽をきいて、他のクラスの人と一緒に踊って歌ってアイドルの応援をした。園長が遊戯室に来てくれ、「アイアイ」を本物のギターで演奏し、皆で歌い、最後は紙吹雪を飛ばした。
5/24 (金)	ドラゴンズデー パート1	ドラゴンズが好きな人たちが多く「ドラゴンズごっこしたい!」という声があり、何が必要かと聞くと、「まずは、ユニホーム!」という事で、野球が大好きで、よく家族で野球観戦に行く子が家からユニホーム、帽子、応援歌のCDを持ってきてくれることになった。今日はYくんが持ってきたユニフォームをよく見て、子どもたちがTシャツに布用クレヨンで描いた。背中側には、クラスの名前をかいてもらっていた。ドラゴンズを応援するチアをやるということで、女の子には布を切って、チアのスカートを作ることになった。(保育者と子どもと一緒に)作った衣装を着て「ドラゴンズごっこ」を楽しんでいた。
5/28 (火)	ドラゴンズデー パート2	ドラゴンズごっこをするのに、何が必要なのかを子どもたちに聞いて書いていった。まだ完成していないTシャツの続きと帽子、ホームベースを作ることになった。まずは、布描きクレヨンで帽子にドラゴンズのマークを描いていった。鉛筆でホームベースの形を段ボールに描いてから、保育者と一緒にカッターを使い、真剣な表情で切っていた。ホームベースは固くしたいので、同じ形のもの4枚ボンドで貼り付けることになった。今日はホームベースが1つ完成した。作ったグッズを使って、ドラゴンズごっこを楽しんだ。
5/31 (金)	ドラゴンズデー パート3 旗作り	応援するのに他に何が必要か聞くと、「大きな旗! あと、太鼓もあるんだよ」と答えるが、実際に持っている人はいなかった。そこで、「どうする?」と聞くと「パソコンで調べる」という事で、パソコンで画像を検索し、棒は新聞の広告をクルクル巻き持つところを作り、旗の部分はカラーポリ袋で作っていた。3歳児は新聞を巻いていくが、とどろろ棒が出来てくると、戦いごっこになってしまった。 「応援するならもっと大きいのがいいよね」と更に大きい旗を皆で作った。マークも付けたいので、保育者がマジックペンでドラゴンズのマークを描いた。その上から子どもたちがビニールテープを貼ってマークを作った。「こども貼るよ!」と声をかけたり、ドラゴンズの応援歌を歌ったりしていた。 旗を作った後は、皆で園庭へ降りて、2階に飾った旗に向かって、ドラゴンズのCDを聴きながら、ノリノリで歌ったり、楽器を鳴らし楽しんだ。皆で話し合い、来週は楽器を使ったり、衣装を着たりして、アイドルコンサートごっこをやることになった。
6/7 (金)	チケットとちらし作り	コンサートに必要なものをみんなで考え、チケットとチラシを作り始めた。でき上がったチケットがなくならないように箱を用意して、その中に入れていくことになった。皆でチケットにドアラやパブリカのような絵を描いて、たくさんのチケットができあがった。チラシの方はまだできていない。今回はチラシ作りをがんばりたい。
6/11 (火)	チケットとチラシ作り パート2	この間作ったチケットを子どもたちが数えると20枚ある。保育者がどれだけ作るか聞くと、幼児の他クラス分いと答え、何人いるのか実際に数えに行くことになった。それぞれが人数を数えていたが、「休みの人もいる」と気が付き、「何人だろ」と言っていた。それぞれの担任に聞いてみると、どちらも22人と教えてもらい、チケットはまだまだ足りない気がした。 チラシ作りの方では、前回5歳児が飾りつけをした紙に、場所、コンサートの名前を書いた。「雨の日は外でできないよね」と、雨の日の場合は遊戯室でやると皆で決めて、雨天の場合のことも書いた。チラシに、イラストや文字が入って、とっても素敵に仕上がる。チケットもチラシもできてきたので、コンサート開催までもう間近か!! 次回も引き続き、たくさんのチケットを作っていきたい!!
6/14 (金)	コンサート 予行練習	大きな旗が完成し、女の子も「私たちチアドラゴンズがいい」と言うので、保育者がスカートを手作りし、みんなで応援合戦をすることにした。「パブリカ聴きたい!」と言うので、最初にCDでパブリカの音楽を流してみた。すると、みんなが知っているパブリカのダンスをしながら歌を歌い始めた。Rの部屋から楽しそうな音楽が流れてきたので、他のクラスの人もやってきて、みんなで一緒に歌やダンスを楽しんだ。 他の部屋の人も来て盛り上がりきたため、遊戯室に移った。衣装を着て、タンバリンを鳴らし、ドラゴンズのCDとパブリカのCDを聴きながら歌って踊った。しばらく楽しんでいると、「応援には太鼓がいるじゃん!!」という事で、太鼓を出してあげると、いつもは触れない太鼓に「本当にいいの?」という感じで、ニヤニヤしながらそーっと叩いていた。慣れてくると音楽が聞こえなくなるほど力強く打っていた。 前回のコンサートで使った紙吹雪があったので、曲の最後になると上へ飛ばして舞い上がった紙吹雪を拾い、何度も繰り返し投げた。最後に5歳児が散らかった部屋をほうきで掃除してくれた。
6/18 (火)	コンサートの 動画見る	コンサートには、他に何があるかという話になり、皆でコンサートの動画を園長・主任にお願いして見せてもらう。見たいと言ったパブリカのコンサートの動画を見ると、皆で歌を歌い、とっても楽しそうな雰囲気になる。動画を見ながら、「コンサート何があるかな?」と聞いてみると「ライト!! 懐中電灯でいいじゃん!」と言ったり、「本もって踊っている人がいる!」(司会者)と、それぞれが気付いたことを話していた。
6/20 (木)	コンサートの 絵を描く ボールを バットで 打ってみる	最初に前回のコンサートの動画を見てどんな会場だったのか、何があったのかを絵に描いてみた。大きな紙が近くにあり、「皆で描けばいいじゃん!」と2チームに分かれ、1枚の紙に何があったのか、それぞれ話しながら、絵を描いた。「ここ黒いカーテンね!」「ライトがきれいだった」と話していて、ピカピカ光っていたライトが一番印象に残っていたようだ。それぞれのイメージを共有しながら、「椅子こじやなかった?」などと話しながら表現していった。 子どもたちがやりたいと言っていた野球も練習してみた。バットとボールを借りてくると、Kちゃんが「これ(ホームベース)は?」と持ってきてくれて、「そうだ! 作ったじゃん!」とホームベースも使って練習することができた。ベンチに座り、順番に一人ずつ担当が投げたボールを打ってみた。見事ヒットする人もいれば、目をつぶってバットを振ってしまう人など、それぞれ楽しんでいた。コンサートや野球の準備をしながら、ますます楽しみがふくらんだ。
7/26 (金)	コンサートの ステージ作り	久しぶりにコンサートの準備がしたいということで、チームの皆でコンサートのステージを再現していった。4歳児が、椅子を運んで、観客席のようなものができた。ライトの準備をしていた人たちは、保育園にあるライトに電池を入れるが、向きを間違えているのでなかなか入らず、何回も電池を入れ直していた。ライトがつくと、天井に向かって光らせてみたりして遊んでいた。 保育者が「コンサートの練習してみる?」と聞くと、かわいい衣装を着ていた人たちが椅子の上に上り始め、CDを流すと音楽に合わせて踊っていた。4歳児の作ったステージで踊りが終わると、5歳児が「ぐらぐらしちゃうよ」というので「どうしたらいい?」と聞くと新しいステージを作り始めていた。どちらのステージがいいのか皆で話し合っ決めていく。
8月初	クッキング	「名古屋ドームには、フランクフルトがあるんだよ」「知ってる〜ピザもあるよ」「食べたいね」との会話から「クッキングしたい」と話していた。その為、年に数回行っているクッキングで名古屋ドームの雰囲気が感じられるようにフランクフルトとピザを作る事にした。
8/9 (金)	コンサート 会場作り	コンサートの会場作りが始まった。まず最初に「大きなスクリーンが欲しい!」というので、材料から集めた。段ボールを切り開きガムテープで貼り合わせるのを、テープを切ってくれる人、貼っていく人と別れて行った。保育者は何も言わずに、材料も道具も全てみんなが決め、進めていった。次にスクリーンを白くするために、のりで白い紙を貼っていった。手で塗る事を嫌がる子もいたが、ほとんどの子はのりの感触を楽しんでいるようだった。
8/27 (火)	会場の ライト探し	会場を照らすライトも探した。今までのプロジェクト型保育で使っていた物がそのまま残っているので、材料コーナーから自ら選んで持ってきた。そして、光がつくか試していた。「赤い光にしたい」「ピカピカついたり消えたりするのがいい」など思いが溢れる。カラーポリ袋で包んでみる人、ペンで色を付ける人、クリスマスのイルミネーションを探しに行く人などがおり、何日もかけてライト探しが続いた。

「まだまだ足りない」という言葉が出ている。何枚作るかも子どもたちの意見を聴き、他のクラスの人数を数えに行くことになった。その日、欠席の子どもがいることにも気付くとともに、自分たちで目標をもってチケットを作成することにつながっている（表1 6月7日）。さらにコンサートに必要な物を考えるために、コンサートの動画を見てイメージを膨らませている（表1 6月18日）。動画からすぐに制作に移るのではなく、どんな会場だったのか、何があったのか思い出しながら共同で絵に描いてみた。5歳児中心に描いたが、それを全員に見せる（表1 6月20日）ことによって、イメージを共有することができた。

Y児も「ライトがきれいだった」と言いながらコンサートの絵を描いており、ライト探しやチケット作りには積極的に参加し、チケットの枚数を数えたりしていた。

(2) 活動の広がり子ども同士の関係

年齢の違う子ども同士の刺激や関わりもあった。5歳児が段ボールを切って、「パプリカドラゴンズコンサート」と書いてチケットを作っていたのを見ていた3歳児も書きたくなり、絵を描くなど、自分のできる方法で参加している。プロジェクト活動は全員参加を強制するものではなく、やりたくなったら多様な方法で参加することを保障しているのである。

7月のコンサートごっこでは、5歳児が3歳児に、衣装を着せてあげたり、ティアラを付けてあげたりする姿が見られた。ステージ用の椅子を並べたのは4歳児で、踊り終わって5歳児がぐらぐらすることを感じ、テーブルと箱積み木を使ったステージを作り始めた。このように考え方が分かれるときは、保育者が整理してどちらがよいか子どもたちに相談している。

Y児は同年齢の友達とのあそびでは、トラブルが多かったが、プロジェクト活動の際にはトラブルはほとんど見られなかった。Y児はトラブルがあると、保育者に訴えてきたり、相手の謝り方に納得しなかったり、手が出てしまうこともあったが、7月には自分でも相手に話そうとする姿が見られるようになってきた。トラブルの際の個別の支援もあったが、プロジェクト活動中での話し合いの積み重ねが影響しているのではないかと考えられる。Y児と他児との関係は、以下の記録にみられる。

〈記録3 6月14日〉

ドラゴンズ好きのY児が、この日は園を休んで東

京ドームに観戦に行っていた。「僕は東京ドームに行くから、この日お休みする！」とずっと前から言っていた。その日はみんなから、「ドラゴンズの応援がしたい！」と声が出たので、みんなの声が東京まで届くよう、園舎の二階から旗を掲げ、園庭でドラゴンズ応援歌を大熱唱した。

作ることだけに偏るのではなく、遊びながら必要なものを考えていったことによって、楽しくプロジェクト活動を継続できたといえる。コンサートの準備をしながらも、子どもたちがやりたいと言っていた、野球の練習も並行して行っている。やりたい子どもはベンチに座り、順番がきたら一人ずつバットで担当が投げたボールを打つのを見ていたが（表1 6月20日）、この見て待つということも、とくにY児にとっては大事であった。

秋には運動会などが入り、しばらくこのあそびが中断していたが、11月に今まで行ってきたことを振り返り、活動途中になっているものを確認し、またやりたいということで、パプリカドラゴンズコンサートが行われた。ステージ作りでは、以下の記録に子どもたちの関係や考えが現れている。

〈記録4 11月5日〉

ステージは机で、客席はベンチで作ることになり、みんなで遊戯室に運んでいった。「ベンチは何個必要？」「え～わからん」「一つのベンチに何人座れる？」と聞くと5歳児が友だちと順番に座っていき「5人！」「じゃあ、みんなで何人お客さん来る？」「40人！」「じゃあ、ベンチは何個必要？」「分からん」「1つずつ座っていけば分かるんじゃない？」と40まで数えながら順番に座り、必要な数のベンチを並べていった。1、2歳児も呼びたい！という事で、乳児用の客席も作った。大型積み木を持ってきて「赤ちゃんはひっくり返るといかんから背もたれがいる」「横に倒れちゃうといかんから肘置きもある」と年長さんが来てくれる人のことを考えて、特別な客席も作ってくれた。

このように、秋の本番のコンサートのときは、乳児のことも考えながら客席を設置し、他のクラスが持ってきてくれた応援グッズを借りてステージに上がっている人の応援をするなど、活動が他クラスに広がってお客さん役も交互に楽しむことができていた。5歳児

は、ステージに上がらないときは後ろの方でパブリカを踊って、皆のお手本をするなど、他クラスを主役にしてバックを楽しむこともできており、全体が盛り上がっていた(表1 11月15日)。

3. 忍者ごっこ

(1) プロジェクト活動が始まる際の保育者の援助

6月ごろから、「忍たま乱太郎」をよく見ていた5歳児が、忍者ごっこらしきあそびを始め、保育者が聞くと「忍者になりたいんだ」と言っていた。7月に入ってから忍者ごっこもプロジェクト的活動になってくるのだが、この活動はどのようにしてクラス全体の活動になったのか、初期の記録をみてみよう。

〈記録5 7月9日〉

「忍者ごっこがしたい!」と声上がり、普段か

ら忍者になりきって遊んでいたが、“もっと忍者について調べたい!”と園の中に忍者の本がないか探した。各クラスの本棚を探し、園の玄関にある貸出図書の中も探す。それでも、忍者の本はなかった。そこで、園長に相談し忍者の本を買ってもらった。そして、忍者の本が届いたと連絡をもらい、事務所までみんなで取りに行った。

保育者が本を揃えておくのではなく、本を子どもたちに探させ、ないので買ってほしいと要求を出させることによって、より子どもたちを主体的にさせる。そして、本で調べることは、やはりイメージを膨らませ、作りたいものを考えることに役立っている。

忍者頭巾の巻き方も、本を見ながらやってみる子がおり、うまくできなくても子どもたちに考えさせてい

表2 忍者ごっこの流れ

月日	タイトル	内容
7/9 (火)	忍者ごっこ	忍者ごっこがしたいと意見が出たので、園長に頼んで買ってもらった本を見ながら忍者について調べ、子どもたちが使えそうなもので忍者ごっこを楽しんだ。本の中に忍者頭巾の巻き方が書いてある。最初はタオルを使ったのだが、短くて巻けないと気付いた。「何で巻いたらいいと思う?」と聞くと、子どもたちが使えそうなカラーポリ袋を見つけた。それを使って、頭巾をつけ忍者になりきっていた。手裏剣も作りたいということで、折り紙を使って作った。作り方が分からないところは保育者に聞いたり、2枚の折り紙を重ねのりを貼って、手裏剣を作ったりしている子もいた。 本に忍術が載っているのを見つけた子どもがいた。自分の持っているバスタオルで体を隠し「どこだ!」とかくれんぼをする人や、カラーポリの中に入って隠れる人などがいた。今回忍者ごっこを見て、忍者について知り、おもしろいと気づいたので、次は体を動かして、皆で修行をしたい!
7/12 (金)	忍者ごっこ ～プール編	前回、本の中に忍者は水の中でも息ができるということや、水の上を歩けるということを知り、皆もやってみようということや、プールでどうやったらいいのか話し合った。最初に、皆で決めたストローを使って、水中でも息ができるのか確かめてみた。水の得意な5歳児は、ストローをくわえて泳ぐことに成功! 4歳児はストローを水に付けてブクブクと息を吐いて遊んでいる人もいた。 「忍者って水の上歩いてるよね」という声から、みんなでどうしたら水の上を歩けるのかを考えた。たどり着いた意見は、「忍者だって足に何かをつけて水の上を歩いている! だったら水に浮くものの上に乗ればよい」ということだった。そこで、みんな一斉にプールサイドに置いてある物をプールに投げ入れ、浮き輪、ビート板、たらい、手作りのいかだなどに乗ってみるようになった。いかだは、年少、年中はその上に立てなくても、とても満足しているようだった。5歳児は「本当は立って歩きたかった!」と残念がった。「立つことは出来なかったけど、何かの上に乗れば立っているような気持ちになれた」と言っていた。ますます忍者に対しての疑問や憧れが強くなっているのを感じた。最後は、小さいプールを浮かべ、船のようにして遊んだ。水の中でも忍者の体験をし、体を動かして楽しんだ。
7/16 (月)	煙を集める	園長が皆の持ってきた木や紙を燃やしてくれて、子どもたちはもくもくと上がる煙を一生懸命カップに入れようとした。煙を紙コップに集めて、カップを開けてみると、少ししか煙が出なかった。 「もっとたくさんの煙を集めたい!」という人たちに「たくさん煙が出るものって何がある?」と聞くと「花火!」「花火屋さんに行き!」「じゃあ、園長さんに相談してよ!!」園長が車で近くにある花火屋さんまで連れて行ってくれた。そして「煙って、どうやって集められますか?」と聞くと、「難しいんだけど、ビニール袋になら集められるかもしれないよ」と教えてくれた。
7/29 (月)	花火で煙を集める	この前4歳児に買ってきてもらった花火を楽しんだ。園長が花火に火をつけてくれて、花火屋さんから教えてもらった煙の集め方をやってみた。上から袋をかぶせると煙が逃げてしまい、なかなか集まらない。上がった煙がとても強すぎて「ゲホ、ゴホ」と咳をしている人や走り回っている人もいた。なかなか袋に入らず、園長が煙を上手に袋に入れて、皆に渡してくれた。煙の入った袋を受け取ると「わたあめだ!」と言ってとっても嬉しそう。煙を捕まえることに大成功した。
8/6 (火)	忍者屋敷を作りたい	「忍者屋敷が作りたい!」という事で、忍者にとっても興味を持っていた人につられて年長さんが中心になり本に載っていた忍者屋敷を大きく拡大コピーをしてみんなの前で、「こういう忍者屋敷が作りたい」「ここにドアがあって」と説明した。すると、「大型積み木で作る!」と声上がり、みんなでホールに積み木を運んだ。どんどん忍者屋敷の形ができていった。すると、Rの部屋から発砲スチロールで出来ている剣を持ってきて、忍者ごっこをしている人や隠れている人もいた。
8/20 (火)	忍者カエルを作る	部屋に忍者のシールがあり、そこには大きなカエルに乗った忍者がいた。すると、「今度はカエルに乗りたい!」「何で作るの?」「水に浮くもの!」と言うと、一斉に部屋を飛び出し沢山の浮き輪を持って帰ってきた。そしてシールにもあるように、緑とオレンジのカラーポリ袋で包んでいった。
8/23 (金)	忍法カエルに乗るの術	前回皆で作った「忍者カエル」をまずは浮かべ、ちゃんと浮くか確かめた。浮き輪と浮き輪をくっつけたが、カエルの顔部分がクタクタと折れてしまい、皆心配そうにしていた。最初は、手で押して遊ぶ人もいたが、保育者に乗せてもらおうと見事「カエルに乗る」の術が大成功した。4、5歳児はコツをつかむと、ヒョイッと乗ってしまっている。なかにはカエルの口部分に入ってしまう人もいた。次の忍者ごっこは「ムササビの術」という忍法をやってみようということなので楽しんでいきたい。
8/28 (水)	ムササビの術	「ムササビの術がしたい」というみんなに「どうしたら空が飛べれるかな?」と聞くと、「風船いっぱい持つ」「高いところから飛び降りる」「風のあるところに行く」と声が出る。カラーポリ袋に風船を貼り付けていき、それをマントのようにしてプールに勢よく飛び込んでいった。 「(水に飛び込むことが)怖い」という人もいたため、どうするかを話し合うと「やわらかいところに飛び込めばいいよ」「やわらかいもの何がある?」と考え、3歳児のお昼寝布団があることに気づき「何枚も重ねて使う」ことになった。

る（7月9日）。手裏剣などの作り方も、1つの方法ではなく、子どもによって、違っている。しかし、わからないところは保育者に聞いたりもしている。また、本を見て、忍者になって隠れてみるなど、それぞれの楽しみ方を保障している。やってみておもしろさに気づくことが大事である。

(2) 集団でアイデアを出し試行錯誤する

やってみたいがどうしたらできるか、みんなで考えてみないと難しいこと（水中で息をすることや水の上が歩くこと）は話し合っている（表2 7月12日）。プールでストローを使って水中で息ができるのか確かめたり、ビート板の上を歩いてみたり、うまくいかなければ協力して他の方法を試し、想像するだけではなく実際にやってみていることが、この実践に特徴的なことである。

〈記録6 7月16日〉

普段の生活の中でも忍者についての会話が多くなってきた。「女の忍者もかっこいいんだよ」「忍者はご飯何食べてるんだろうね」「忍者って、悪い奴をやっつけるんだよね」「忍者は悪者から逃げる時、煙を使うんだよ」という人がいた。すると、「煙で敵をやっつけるんだよ」「煙で隠れてるんだよ」など思っていることを次々に話してくれる。「みんなで煙を集めたい!」「じゃあ、どうやって煙を集めるの?」と聞くとしばらく考え、「これこれ!」と紙コップを2つ合わせてその中に煙を閉じ込めると言う。そこに偶然通りかかった園長に「煙を集めるために、火をおこしたい」とお願いすると、「何を燃やすんだ?」と言われて、皆で探し始めた。保育園にある木と紙を見つけてきて煙を作るようになった。園長が皆の持ってきた木や紙を燃やしてくれて、見事、煙が上がった。もくもくと上がる煙を一生懸命カップに入れようとしている子どもたち。煙を紙コップに集めて、カップを開けてみると、少しだけ、もわっと煙が出るところが見られた。忍者の使う煙玉を作ってみたが、煙が薄く、なかなか忍者のようにならなかった。

これらの活動はクラス全員の子どもたちが楽しく参加できる活動であり、Y児は積極的に紙コップを持って園長に尋ねていた。煙を集めることも、1回目はうまくできず、次には花火問屋に行って教えてもらった煙の集め方をやってみた。火や煙が怖くうまく集めら

れなかった人に対して、失敗で終わらせず、園長が、煙を上手に袋に入れて、皆に渡してあげた（表2 7月29日）。このようなうれしい体験も重要だったといえる。Y児は、7月には、自分が休園の日に「楽しいことしないで」というくらい、プロジェクト活動を楽しみにしていた。

「ムササビの術」では、みんなで考えてカラーポリ袋に風船を貼り付けてそれをマントのようにしてプールに飛び込むなど、子どもならではの発想を引き出している。水に飛び込むことが怖いという3歳児の声も大事にして、どうするかをみんなで話し合い、やわらかい布団を重ねたところに飛び込むアイデアも実現している（表2 8月28日）。

その後も忍者ブームは続き、運動会では、忍者の衣装を着て入場し、準備体操、その後「まじめ忍者」の曲に合わせて、蛇の目傘を持ってダンスをし、バルーンをした。他の種目も忍者にちなんだ競技を行い、5歳児は“全力疾走! 目指せ立派な忍者”というタイトルで障害物リレーを行った。

4. 相撲ごっこ・土俵作りと忍者屋敷作り

(1) あそびと制作の統合

園では、毎年ゴールデンウィーク後に、園の行事で「こどもの日」にちなんで「お相撲大会」を行っている。マットを2枚つなげ、土俵を作って遊ぶのだが、家庭で相撲を見に行ったことがある子どももおり、クラスでの「プチお相撲大会」への関心・意欲につながっている。この日は、日常のあそびとは違って保育者は、かつらとまわしを作って対戦の演出をし、優勝した子どもにまわしをプレゼントすることで、盛り上がりを作り出している（表3 5月4日）。その日に子どもたちが「これでおしまい嫌だ」と言ったので、「じゃあ、好きな時にお相撲していいよ」と言ってマットを置いておいた。プール活動が終わった9月も、マットの上での相撲ごっこをY児も含めて楽しんでいた。園には相撲についての絵本が無かったので、図書館で借りてきた『はっきよーどーん』も読んで、おすもうさんのイメージも共有できていた。

12月に子どもが家から持ってきた相撲の本をみんなで読むと、土俵の上で相撲をとってみたいという声があがった。遊ぶために必要なものを作るという、制作の必然性が生じている。改めて土俵を自分たちで作ることになった際には、実物を見ることも大事にしていた。近くの地域にある土俵をみんなで見に行きそこで相撲をとってみた（表3 12月20日）。そしてこ

こでも、どうやって作るか子どもたちに考えさせている。まず5歳児が土俵を絵に描いて、3、4歳児は「トントン相撲」を作って遊んでみた。大きなダンボールをどう開くか、どうやって土俵を高くするか、土俵の側面をどうやって斜面にするか、段ボールの長さをどうやって調整するか、段ボールの土俵の上にどうやって砂をのせるか、相撲図鑑も見ながら考えて取り組んだ。写真をよく見て土俵の屋根の色を決め、カラーポリ袋で巻いていった。屋根から下がっている水引幕に付いている紋の写真を拡大してみて、桜の模様を作るために、紙に写し絵をして、切るなど、屋根の細かい部分も再現していった(表3 12月23日～2月7日)。

相撲の土俵作りは考えることが多く、Y児はあまり

入ってこなかったが、屋根の上から下がっている房は作っていた。カラーポリ袋を編んでいくのだが、ねじるのが難しく「ここ持ってて」と3歳児に持ってもらって行っていた。保育者は、無理に参加させることはしないが、「ここ(房)だけは、年長みんなで作ろう」と言って取り組んだ(表3 2月7日)。

そして子どもたちの要求により、一つのプロジェクトに絞るのではなく、以下のように、土俵と一緒に忍者屋敷作りにも取り掛かることにした(表3 1月14～24日)。

〈記録7 1月10～14日〉

子どもたちが「忍者屋敷も作りたい!」というので、土俵と一緒に忍者屋敷にも取り掛かることに

表3 土俵作り・忍者屋敷作りの流れ

月日	タイトル	内容
5/4 (火)	プチお相撲大会	5月7日に行った「お相撲大会」をクラスでやりたいということで、プチお相撲大会をした。トーナメント形式で、3歳児、4歳児、5歳児それぞれ1番強かった人を決めた。保育者が行司になり、優勝した人には、保育者が作ったまわしをプレゼントした。相手を白線の外へ出そうと押し合う姿や外に出ないように踏ん張る姿がとってもかっこよかった。
12/23 (月)	土俵作り	前回皆で土俵を見て、今日から実際に土俵を作っていくことになった。「どうやって作る?」と聞くと「段ボールの上に砂のせる」「でも固まる?」と聞くと「そしたら冷凍庫に入れちゃえばいいんだよ!」の声に、皆で「そんな大きい冷凍庫あるかなあ」と笑い合っていた。話し合いが終わると早速段ボールを探し、大きな段ボールを見つけると、保育者に手伝ってもらい、皆で運んだ。 段ボールを開きたいが、角には硬いホッチキスが付いていて取ることができないでいた。「横を切っちゃおう」という声が上がると保育者と一緒にカッターを使ってダンボールを切った。土俵の大きさは、普段すもうごっこで使っているマットに合わせるようになった。つなぎ目を「隙間があくからしっかりくっつけて!」と言ってガムテープで貼り合わせていた。ここからどうやって土俵にしていくか一緒に考えていった。
1/6 (月)	土俵作り	相撲図鑑を見てみると土俵は高くなっていることに気が付いた。そこで高さをだすために皆で考え、大型積み木を使って前回作った段ボールに合わせて土俵を組んでいった。巧技台と大型積み木の木の高さが違うため、段差ができてしまった。段差をなくすにはどうしたらいいか考え、牛乳パックを積み木の上に載せ始めた人がいて「これなら合うよ」と発見した。それだけではつぶれてしまうことを話し、「中に新聞を詰めたらいいよ!」と教えてくれる人がいた。皆で新聞を詰めて組み合わせていった。
1/9 (木)	土俵作り	土俵は四角形ではなく側面が斜めになっていると気が付き、斜めをどうやって作るのか聞くと、段ボールで作ることになった。大きくて丈夫な段ボールを集め角を切って開き1枚にして土俵に合わせて、斜めにすることができた。段ボールを切って合わせてみるが、幅が足りないで「小さい段ボールをくっつけよう」ということになったが、別の段ボールを切って並べてみると、次は長すぎてしまった。「同じ高さにするにはどうしたい?」と聞くと「定規で線を引いて切る」という意見が出た。そんなに長い定規はないので、さらに考え、基準にしていた段ボールを長い段ボールの上に乘せてそこへ線を引けば線を引けることに気が付いた。
1/14 (火) ～24 (金)	土俵の円作り 忍者屋敷の壁作り 回転扉作り 障子作り	土俵の上は、本物らしく砂を敷くのだが、砂が土俵にくっつくようにどうしたらよいか考え、色を塗ってから砂をかけることにした。土俵の上面はできたので、そこに円を再現する。何で作っていくかを話したら「綱引きのやつ」というので最初に綱を倉庫から持ってきてぐるぐる円を作っていた。うずまきになってしまった。これではできないと気が付き、別のものを探すと、土俵のイラストを見てみると、円がかまぼこのような形に描かれていることを発見した。トイレットペーパーの芯を半分切ると、かまぼこのようになるので、芯をたくさん切って並べ、円を作っていた。 「忍者屋敷も作りたい!」というので、土俵と一緒に忍者屋敷にも取り掛かることになった。忍者屋敷の方は、2階の壁を作っていた。忍者の本を見ると丸い窓がついていたので、丸く段ボールをくりぬいて窓を作り、忍者屋敷の壁は黄土色にしたいと4歳児と色を塗っていった。 忍者屋敷の仕掛け・回転扉を作ることになった。どうやったら扉が回転するか考えると、コマを見つけ、コマと同じ棒があると回転すると思いついた。棒だけでは扉が支えきれず倒れてしまうので、どうやって立てるかを悩み、5歳児が「旗みたいに立てればいいよ」と気が付いた。 忍者屋敷の2階の壁を作ったので、次は扉も必要である。本を見てみると障子があることに気が付き、作りたいということで、実際に障子を見て、観察をしていった。
1/27 (月) ～30 (木)	忍者屋敷障子作り 窓作り 池作り	障子の大きさを決め、模造紙を切っていくが、紙1枚では立たなかった。段ボールを同じ大きさに切って、そこへ模造紙を貼り付けて丈夫にすることになった。次は障子の格子の部分なので、細いものを探しに行くと、部屋の奥に細長い棒があったので、木と同じ茶色で塗っていった。乾くと段ボールの大きさに合わせ、間隔を考えながらボンドで貼っていった。棒が、長すぎる所は、鉛筆で描きのこぎり切った。 本を見てみると円い窓に格子がついているので、格子に使えそうなものを探し、給食室で「何か細長いものありますか?」と聞くと、割り箸をくれた。割り箸を丸い窓に合わせてつなげ貼り付けていった。 忍者屋敷の外に修行のできる場所がほしいので、池も作った。池の周りは岩で隠したいと、4歳児と岩作りをした。新聞を丸めて白い裏紙で包み、絵具での灰色の作り方を5歳児に教えてもらい3歳児も一緒に塗っていった。
2/3 (月) ～7 (金)	忍者の修行場作り 池作り 土俵の屋根作り	忍者屋敷の周りに、手裏剣を投げるための修行場をわらで作っていった。ボンドが付いていない所にわらを付けても落ちてしまうことに気が付き、わらの上からもボンドを付けていった。 「すいとんの術」を練習するための池を作る。 写真をよく見て土俵の屋根の色を決め、カラーポリ袋で巻いていった。土俵の屋根には幕の部分があり拡大してみると、桜の模様がついているとわかった。模様を作るために、紙に写し絵をして切っていた。屋根の細かい部分も再現していった。

なった。まずは5歳児に忍者屋敷の絵を描いてもらおうと、年長さんが中心になり、「ここには窓がある」「2階建てなんだ」「屋根は三角だよ」など話しながら、とても楽しそうに描いていた。それから壁になりそうなものを組んでいった。入り口の所が門みたいだということで、「門には屋根がいるよ!」と話していると運動会で使った瓦屋根のことを思い出し、皆で運び、門にのせると、「昔のおうちみたい」と言っていた。さらに「2階を作りたい」と言っていたので作ることにした。最初は丸い筒を使えば2階の床を支えられると話していたので、それを試してみたが、支えが少なく皆が手を放すと落ちてきてしまった。そこでもっと丈夫な支えが必要と考え、段ボールを使うことになった。

支えを丈夫な段ボールに変えたが、持ってきた段ボールの高さが違い、2階の床の板がぐらぐらと安定しないことに気が付いた。そこで一番高い段ボールに高さを合わせるため、大型積み木を載せるとピッタリ合ったので、テープで固定していった。

まずは忍者屋敷の絵を描いてもらいイメージを共有している。忍者屋敷では、2階の壁の丸い窓をどうやって型取ってくりぬくか、壁の色はどうやって作るか、回転扉はどうやったら回転するか子どもたちに考えさせた。また、扉には障子があることに気がつき、実際に本物の障子を観察して、制作に取りかかっていた。

(2) 個性・特性の発揮と認め合い

Y児は、5歳児たちが絵を描くときは別のことをしていたが、屋根を見つけて運んだり、2階を支えるポールを探して運んだりしていた。そして、忍者屋敷の壁の色をカラーポリ袋で巻くことにしたときにどの色にするのか、黒、茶色と並んで「ゴールドがいい人ばくのところへ集まって」とみんなの前に出て呼びかけていた。忍者屋敷の障子を作るときも、以下の記録のように率先して意見をまとめようとしていた。

〈記録8 1月23日〉

「障子は何枚作るの?」と保育者が聞くと「2枚かな?」「いや、4枚だよ!」と意見が分かれた。そこで「チームのリーダー! 決めて!」と保育者が呼ぶとY児が「はい」と前に出てきた。「どうやって決めるの?」と聞くと「うーんとね。僕のとこ2枚の人きてー、4枚の人〇〇ちゃん(保育者)

のとこ並んでー」と人を並べて決めることにした。並んだ人数を数えてみると2枚の人数が多かった。並べて2枚作ることに決まったと思ったが、4歳児が本を見て、忍者屋敷の写真の中の障子は3枚だということに気が付いた。「写真では3枚だよ。」「じゃあ3枚がいいんじゃない?」とすぐに決まった。

Y児は、おしゃべりな特性を生かしてリーダー性を発揮するとともに、自分の意見にこだわらず、写真に基づいて3枚だということを受け入れることができていた。他にも次のような場面があった。

〈記録9 1月24日〉

子どもたちは忍者の本を見て「窓作らなきゃ」「どれぐらいの大きさかな?」「うーん。これくらい」と、手で大きさを示してくれた。「その大きさを、どうやって壁に穴開けようね」「うーん。わからん」すると他の人が「丸い物を置いて線を描くと、丸く開けれるよ。前にやったもん」と教えてくれた。そして、なんと窓の大きさに選んだのは、壁に掛かっていた時計だった。

窓には格子があることに気づいた子どもたちが、割り箸を持ってきた。保育者が、割り箸は先が細くなっていて真っすぐではない事を見せた。すると、しばらく考え1本をひっくり返し、「こうすればおんなじ」と言った。「どうして分かったの?」と聞くと、「細い(幅の)とこ太いとこがあったから。でも、おんなじになるかは分からなかった。」と言っていた。2本を1つにテープで止め、その割り箸を格子のように置いてみた。「みんなで作る!」と決めた忍者の本を見ながら格子を作っていた。その横で、窓に割り箸を1組ずつ縦向きに置き、空いた上下のスペースに今度は横向きで(□の枠を作るように)埋めている人がいた(Y児)。割り箸を足すという感覚が無かったのだろう。すると、言い合いが始まった。「こんなん違う! みんなでこの窓を作るって言ったじゃん!!」「違うって! この窓がいい」「でも、(写真の窓は)こんな形してないし!」。保育者が「どうしようね」と聞くと、「じゃあ、みんなにもう一回聞く! ちょっとお話があります! 僕の窓がいい人~(誰もいない)。「ほら! みんなで決めたんだもん!」「でも僕はこの窓がいい!!」保育者は、このままでは……と思い「窓は全部で何個作るの?」と聞いた。「4個だよ」「じゃ

あ、3個はみんなの決めた窓にして、1個だけ！
4個ある窓の内の1個だけ、Yちゃんの窓にしちゃ～ダメ？」「え～……いいよ」と、納得してくれた。何とかみんなの納得できる窓になってよかった。内心ほっとした。

窓の格子と並行して同時に縄梯子も作っていたが、Y児は、最初に縄を触っていたものの戻ってきて、窓を丸く切り抜くところから参加し、割り箸をどのように置くかずっと集中して長い時間あれこれ床の上で置き直していた。みんなで決めた作り方と違うやり方にこだわるY児だったが、クラスのみんなに説明して合意をとろうとしている姿には成長が感じられる。

その後、全ての割り箸に色を塗り、丸くくりぬいた窓に貼り付けていったが、見本通りに作っていた子どもたちは、丸からはみ出た長い割り箸があるのでテープで貼り付けやすかった。一人頑張って作っていたY児は、割り箸が窓にピッタリの大きさだったので何度も苦戦しながらテープを斜めに貼り、窓に格子を固定した。最後に「こんななら、みんなと同じ窓にすればよかった」と言っていた。保育者は「でも、最後まで頑張って、Yちゃんの窓、完成したね」と言うと、「うん！」と笑顔で答え、とても満足そうだった。クラスの子どもたちも「Yちゃんの窓」と言って、でき上がった後もそれを認め尊重していた。

これらの活動は、細かい部分は5歳児が中心に行っているが、ほとんどクラスの全員が参加していた。「すいとんの術」を練習するための池の周りは岩で隠したいということで、4歳児が中心に岩作りをした(表3 1月27～30日)。池に浮かべる蓮の葉は、牛乳パックの紙と発砲スチロールトレイとどちらが水に浮くか実験した後、保育者が5歳児に型を描いてもらい、3歳児が線の上を切っていた。トレイは切るのが難しいようであったが、3歳児は一生懸命取り組んでいた(表3 2月3日～7日)。作るものが増えてきた段階では、保育者は意識的に全員が参加できるように年齢ごとの役割を作り出していた。

Ⅲ. 総合考察

1. 子どもたちの参加状況

以上、1年間に行われたプロジェクトへの子どもたちの参加状況のみをみると、場面による参加の仕方の違いはあったものの、基本的に全員が参加していたといえる。浜谷は、インクルージョンとは「一人一人の

子どもの意見が対等、平等に尊重されて、子どもたちの生活のあり方が決定される」こととしている。さらに、「参加」状態を「統合・分離」と「インクルージョン・排除」の2つの軸から「参加状態」「共存・独立状態」「ダンピング状態」「隔離・孤立状態」の4つに分類している。「参加」は、インクルージョンかつ統合(子どもたちが場を共有して共に行動し、お互いにコミュニケーションして相互に影響しあっている)が実現された状態であり、そこでは「一人一人がお互いに異なるということが尊重され、それらの意見が平等に尊重される」と捉えている⁶⁾。本実践では、子どもたちの対等な意見表明に基づいて参加が進んでいったといえる。

「参加」の状態・レベルにもいくつかあるが、本実践ではプロジェクト活動に子どもたちが意識的に取り組む前は浜谷のいう「共生」の状態であり、プロジェクト活動を行うことを話し合ってから「協調・共同」(すべての子どもが共に生活できるように生活の在り方を創造し、どの子どもも協働的に活動している)の状態だと考えられる。どちらも、対等・平等に自分の意見を表明することができているが、自分がやりたい活動(好きな恰好をして思い思いに歌を歌ったり自分なりに忍者になってみたり)をしている場面はまさに、「すべての子どもが自然に生活を営み、相互に同期したりしながらにぎわっている」「お互いに響きあう関係で全体がにぎわっている」共生 *conviviality* (共愉) の状態であると考えられる⁷⁾。組織的な活動ではなくても、まずそのような楽しさを共有することが、インクルーシブ保育やプロジェクト活動にとって重要であろう。

漠然とテーマを共有して、自分のやりたいことや思いついたことをそれぞれが取り組んでいる段階は「共生」の状態だといえる。ドラゴンズごっこでユニホームを作る友だちに刺激されてチアの衣装を作って応援しようとする女児がいたように、子どもたちは互いに刺激し合い影響を及ぼし合っていた。また、Y児が欠席して野球観戦に行っている日に、クラスの子どもたちがY児を意識して応援歌を歌っており、物理的に同じ場所にいなくても、意識としてはつながっていた。これらは「相互に関心をもち肯定的な影響を与えている」*symbiosis* な共生⁸⁾だと言えるだろう。

共通のイメージや目標をもってみんなで取り組むようになるのが「共同」の状態である。みんなでお相撲大会をしたり、プールで忍者ごっこをしたり、煙を集

めたりしていた。「共同」の中でも、自分ひとりではできないことを実現するために、目標をはっきりとさせて役割分担や協力がなされるようになる「協同」の参加が次第にみられるようになっていく（コンサートの準備をする、土俵や忍者屋敷を作る）。ここでは、役割や方法を話し合っただけで実行することから、Y児の窓のように、お互いの思いの違いやイメージの違いから、衝突も起きるが、相互に理解しあいながら解決策を探していった。

Y児は4歳児のときは、プロジェクト活動では全面的に参加するのではなく、楽しそうに5歳児がやっているのを見て自分にもできそうだったことや、自分の役割がはっきりして得意なことであれば、積極的に参加していた。また少し困難なことでも、他の子どもたちに教えてもらったり、じっくりと自分のペースで取り組んだりすることができるようになっていった。5歳児になったこの実践では、自分自身の関心から出発している活動が多く、体を動かしたりしゃべったりすることが好きなY児の特徴を生かしてリーダー的役割を果たしていた。就学前の時期にも思ったことをそのまま発してしまったり、年下の子が好きで構いすぎてしまって嫌がられたりすることもあったが、やりたいことは存分に実現でき、Yの良さを発揮することができる取り組みだったといえる。

2. プロジェクト活動の展開方法

プロジェクトの発展のための保育者の援助をまとめると、以下の点が重要だと考えられる。

①子どもの興味を踏まえた環境構成

保育者は、衣装等を子どもたちの興味を察知しながら、自由に使えるように設定しておいたり、本物のマイク、大太鼓、ボールやバットなどの道具を必要に応じて出したりしている。「プチお相撲大会」や「コンサート」の演出も効果的であった。実物を見ることは、イメージを共有できるとともに、とくに本物志向が強い5歳児にとっては、本物のように再現しようとするのに役立った。しかし、保育者が環境をすべてお膳立てするのではなく、必要なものについて子どもたちに要求を出させ、絵本購入や動画視聴、花火問屋への訪問など主体的に関わらせている。

②複数のテーマを同時並行的に進める

プロジェクト活動を1つのテーマに絞らず、子どもの関心によって、複数のテーマでの活動が立ち上がり、そのうちにそれらをドッキングさせた活動になったり、しばらく期間をおいてまた復活してきたり

と、柔軟に取り組まれている。また、同じテーマでも複数のもの作りを同時並行的に進行させていた。そのことによって、子どもたちは自分のより興味のある活動を選ぶことができ、さらにはどちらにも参加するようになり興味が広がっている。年末には、今までやってきた活動をみんなで振り返って、作品展に向けてやりたいことを話し合っただけで決めている。

③イメージを膨らませ共有するための援助

本・図鑑、写真、動画、実物を見せるなど多様な支援が行われていた。また、見たものをすぐ作るのではなく、二次元に描画して構想を共有してから、三次元の制作に移っていることも、よりイメージを共有することにつながっている。これは、レヅジョ・エミリアの実践でもよく見られる過程である。

④試行錯誤しながら思考を促す援助

子どもたちに作り方などを考えさせ、試行錯誤させている。子どもたちはある程度考えたらやってみて、遊びながら楽しめていた。この園の子どもたちはプロジェクト活動の中で自分たちで考えて作ってきた経験があるので、「何が必要か」「どうやって作るか」尋ねるとすぐにいろいろなアイデアが出てくる。失敗しても最後は支援して成功体験・肯定的体験を保障していることも達成感をもつためには重要だと考えられる。なお、子どもたちに「発想する力」が乏しく「具体的に製作する力」が未熟な場合は、遊びが継続発展にくく、もっと保育者の介入が必要になってくるだろう⁹⁾。

⑤目標を共有し見通しをもたせる援助

コンサートに他のクラスの子どもたちを呼んでくる場合に、何が必要か、人数はどのくらいなので、いくつ必要かなど考えるヒントを与えることによって、子どもたちは目標をもち、見通しをもって活動に継続的に取り組むことができている。その意味では、行事のような節目やハレの舞台を設定することも意義がある。毎年テーマをみんなで決めて行っている運動会もその年のテーマは忍者になり、興味を持続していった。

⑥年齢差への配慮

いろいろと詳細を深く考えるのは5歳児中心になるが、5歳児が3歳児に指示を出したり、3、4歳児も5歳児のやるのを見ていて意欲的になったり、真似したり、独自のアイデアを出すようになっていく。また、高いところからジャンプするのが怖いという3歳児に対しては、その思いを汲み、どうしたら怖くない

か一緒に考え、少しでも飛べたことを一緒に喜んでい
る。保育者は、4歳児の出番を意識的に作ったり、5
歳児に形を描いてもらって3歳児に切ってもらったり
するなど、それぞれが活躍できる場面を作っていた。

⑦全員の合意を得て活動を共有するための援助

来週何をするか、コンサートをどこでやるか、壁の
色はどうするか、障子は何枚作るかなど、大事なこ
とはクラス全員の意見を聴いている。また、今日やった
ことをみんなの前で話す時間も設けて、個々の活動を
共有している。そのなかで、3、4歳児も次第に自信
をもって報告することができるようになり、みんなに
認められて達成感を味わえるようになっている。

⑧園外の専門家の力を借りる

園の近所にある土俵を見に行き、実際に土俵の上
に上がらせてもらったり、花火の専門家から煙玉を使
った煙の集め方を教えてもらったりしている。子ども
たちも、自分たちでできないことは周りの力を借りれば
よいことを学んでいっている。

これらの援助は、子どもたちの個性・特性や集団の
活動経験、活動内容の違いによって異なってくると思
われるが、基本的な考え方は共通していると考えられ
る。さらに多様な活動におけるインクルージョンのプロ
セスや保育の方法について検討していきたい。

注

*1 愛知県立大学教育福祉学部教授 *2 私立保育園保育士

*3 名古屋女子大学専任講師

1) 芦澤清音他「障害と多文化を包摂するインクルーシブ
保育の可能性(2)」(自主シンポジウム)『日本保育学会
大会論文集』2020年5月 詳しくは、芦澤清音『発達
障がい児の保育とインクルージョン—個別支援から共に
育つ保育へ—』大月書店 2011年 参照。

2) 山本理絵「異年齢保育が提起しているもの」芦澤清音
他 同上論文。

3) 山本理絵・藤井貴子・近藤みえ子「人間関係に困難を
抱える幼児の異年齢保育における支援(4)」『愛知県立大
学教育福祉学部論集』第66号 2018年 pp. 97-107/山
本理絵・國京恵子「インクルーシブ保育におけるプロ
ジェクト活動の展開方法—異年齢クラスでの実践の分析
を通して—」愛知県立大学大学院人間発達学研究科『人
間発達学研究』第12号 2021年 pp. 85-102

4) 山本理絵編著『子どもとつくる5歳児の保育』ひとな

る書房 2016年 p. 62参照。

5) ドキュメンテーションについては、以下を参照のこ
と。C・エドワース/L・ガンデ^イーニ/G・フォア
マン編、佐藤学・森真理・塚田美紀訳『子どもたちの
100の言葉—レヅジョ・エミリアの幼児教育』世織書房、
2001年 p. 280、ウェンドラー由紀子「スウェーデンの
保育—就学前学校における教育ドキュメンテーションと
プロジェクト活動—」『生涯発達研究』8号 2016年
pp. 61-62

6) 浜谷直人編著『発達障害児・気になる子の巡回相談—
すべての子どもが「参加」する保育へ—』ミネルヴァ書
房 2009年 pp. 23-26

7) 浜谷直人『同上書』p. 24-25

イヴァン・イリイチは、「^{コンヴィヴィアリティ}自立共生」という用語で
「各人のあいだの自律的で創造的な交わりと、各人の環
境との同様の交わり」「人間的な相互依存のうちに実現
された個的自由」を意味した。イヴァン・イリイチ著、
渡辺京二・渡邊梨佐訳『コンヴィヴィアリティのための
道具』筑摩書房 2015年 pp. 39-40

8) 浜谷直人『前掲書』p. 25

9) 浜谷直人『困難をかかえた子どもの保育臨床とファン
タジー』新読書社 2019年 p. 72

付記

本研究は科学研究費(2017~2021年度 基盤研究(c)
課題番号17K04634 山本理絵研究代表)の助成による。

本実践は、白石叔江の以下の研究の一環として、第13
回 TPCEC (Theory and Practice of Child Education and Care)
研究会(2020年10月31日 オンライン)で、内山沙知・
山中智尋により実践報告(「コンサートごっこ忍者の修
行」)されたものでもある。

・2019年度 白石叔江個人研究「プロジェクト型保育に
おけるドキュメンテーションの活用」

・2020年度~2014年度 日本学術振興会科学研究費助成
事業、基盤研究B(一般) 課題番号20H01662、研究代表:
白石叔江 「子どもの声を聴く保育実践の探求:ドキュメ
ンテーションによる子どもの権利の保障—ドキュメンテ
ーションを用いたプロジェクト型保育の探求—」

本文に記載した〈記録〉及び表中の記録は、実践園のド
キュメンテーション及び上記 TPCEC 研究会で報告された
園の記録から抜粋し、文体と一部の表現を変えてあるこ
とを断っておく。

研究に協力していただいた皆様に感謝します。